



TITLE:

「ルーシ」という語の意味に関する歴史的考察(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

木崎, 良平

CITATION:

木崎, 良平. 「ルーシ」という語の意味に関する歴史的考察. 京都大学, 1964, 文学博士

ISSUE DATE:

1964-09-29

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211328>

RIGHT:

【 9 】

氏 名 木 崎 良 平
き さき りょう へい
 学位の種類 文 学 博 士
 学位記番号 論 文 博 第 10 号
 学位授与の日付 昭 和 39 年 9 月 29 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 「ルーシ」という語の意味に関する歴史的考察

論文調査委員 (主 査)
 教 授 井 上 智 勇 教 授 前 川 貞 次 郎 教 授 泉 井 久 之 助

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、第一部「初期の段階における「ルーシ」」、第二部「9—10世紀の「ルーシ」」、第三部「第二段階における「ルーシ」」、第四部「第三段階における「ルーシ」」の四部よりなり、全文11章にわかれる。著者は「ロシア」の古名である「ルーシ」という語について、ロシアおよび世界の学界でノルマン人をさすとするものと、スラブ人とするものと両説が対立している現情において、ロシア建国と結びついているこのルーシ問題に、何らかの結論を出すべき学問的必要から、この問題の解明にあたらうとする。その際著者は、従来この問題が、ロシア国家の起源の問題と絡んで、10世紀以前の時期についてのみ論争されて来たことを反省し、ロシアにおいて確実な史料が編集されるに至った11世紀以降の時代に「ルーシ」が何を意味したかを検討し、ひるがえって初期の時代にその語が何を意味したかを推論しようとする。

著者は第一部において、5世紀の教会史家ソクラテスの教会史にあらわれる「ロース」なる語がルーシという種族をあらわすものでなく、頭・首長・族長・盟主を意味したこと、「ザハリアス・レトルの教会史」中にみえる「フロス」なる語も、ヴェルナドスキーの主張するようにルーシ人を意味しないこと、またアラビアの歴史家タバリの年代記にみえるルーシ人の記事は10世紀にこの年代記を補筆したバリアミの加筆によるものであること、8世紀のギリシアの年代記者テオファネス・コンフェサーの年代記にみえる「ローシオスの船」は、ヴェルナドスキーの主張するように「ルーシ」の船の意でなく、この年代記のラテン語訳者アナスタシウスの訳したように「赤い船」を意味し、ルーシなる種族の存在を立証するものでないこと等を一々史料を分析して論証し、結局、11世紀中頃から12世紀のはじめに編集されたロシア最古の年代記「ロシア原初年代記」にスラブ人およびフィン人に招かれた「ルーシ人」の記録が、実在の種族についての最初の記録であることを論説する。ついで著者は「ロシア原初年代記」の内容を克明に分析して、「ルーシ」がロシアに侵入したノルマン人（ヴァリャーク人）であることを立証するとともに、さらに8世紀末～9世紀始めの「聖ステファン伝」、10世紀のリュトプラント司教の記述、その他のギリシア、ラテン、アラビア作家たちの記録を通して、「ノルマン人説」の正当性を根拠づけ、「スラブ人説」の

不当を力強く論説する。

第二部は第一部の論証をふまえた上で、「ルーシ人」の根拠地がスカンジナビアに近い、北ロシアのノヴゴロド周辺にあったことを「ロシア原初年代記」、「ベルタン年代記」、その他の史料の分析を通して論証し、いわゆる「ルーシ汗国」とは、まさにノヴゴロドを中心とした「ノルマン国家」であったと推論する。ついで著者は、「ロシア原初年代記」の記述に「ルーシ」がキェフを中心とした国家を建設した事実を記した点に注目し、それは10世紀後半、ノヴゴロドを中心としたノルマン人が、南方への移動をおこし、キェフを中心とした公国を建設した歴史的事実に対応するものであることを詳説する。

第三部において著者は、10世紀後半以後における史料にみえる「ルーシ」の意味が、ノルマン人を示す種族的意味から、キェフ国家の勢力範囲を示す政治的地理的意味と、キェフ国家がギリシア正教を導入して以来、ギリシア正教徒によって構成されたキェフを中心とする新しい宗教的国家を意味するに至ったことを検証し、ひいては「ルーシ」の第二段階の用法の時代にも、決して東スラブ人という種族的乃至民族の意味を意味しなかったことから、「ルーシ」が本来スラブ人であったとする説の誤りを強調する。

第四部では著者は、13世紀以後のロシアの歴史的発展に即しつつ「ルーシ」問題を検討する。即ち、13世紀には東から蒙古人、14世紀には西からリスニア人が侵入し、ロシア地方の情勢が大きく変化する。それとともに「ルーシ」という語の意味も大きく変化し、北東ロシアを含むに至った。しかし「ルーシ」と深い関係のある「ロシア」および「ルテニア」という語は、決して東スラブ人という概念と一致しない。もちろん「ロシア人」という語は深く東スラブ人という種族的・民族的な意味をもたされているが、実際には「ロシア民族」とは文化的・政治的所産としての民族にすぎない。また「ルテニア人」とは、ギリシア正教の西方支派の人々のことでこれも種族的・民族的な概念ではない。即ち「ルーシ」と関係する「ロシア」という語が出現する「ルーシ」の第三段階の時期にも、東スラブ人という独自の種族的・民族的統一は存在しない。ましてや「ロシア」という語の出現していなかった時期において、即ち「ルーシ」の第二段階において、「ルーシ」という東スラブ人からなる民族が存在したとはいえない、と著者は多くの史料を引用しつつ主張し、第三部の所説をさらに強固ならしめようとする。以上の考察から、著者はロシアのみならず世界の学界の一重要問題たる「ルーシ」問題について、スラブ人説を排してノルマン人説の正当なることを主張するのである。

論文審査の結果の要旨

ロシア史の研究はわが国においては、必ずしも進んだ研究分野とはいえない。著者は早くからこれに注目してロシア史全体の解明に努力してきた。そしてロシア史研究の最初の問題たるロシア国家の起源にまつわる「ルーシ」問題をとりあげ、ロシアおよび世界の学界の論争点となっている「ルーシ」が、本来東スラブ人かノルマン人かという問題にとりくみ、最後の結論を見出そうとする。

著者は、従来の論争が、主として建国時代の「ルーシ」のみについて研究してきたのに対して、「ルーシ」なる語の意味の変化に注目し、その意味の全体的な発展を詳細に分析検討して、それによって本来の意味を見出そうという独自の立場に立ち、ロシアおよび世界の学界の諸研究を渉猟するとともに、ロシアのみならず、「ルーシ」について伝える諸外国の数多の史料を綿密に分析・検討し、もって「ルーシ」が

本来「ノルマン人」をさしたことを論証した。

蓋し著者の論証概ね正鵠を得、その独自の立論また首肯せしめるに足る極めて優れた研究であり、学界に貢献する所大であると信じる。ただ第四部は前三部の緻密な論証に比してやや粗なる憾なしとしないが論文全体の主張に対して影響を与えるものではない。副論文「ロシア史研究」、「ロシア・ソヴェトの歴史」の二著は著者のロシア史についての広汎な知識を立証して余りがある。よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。